

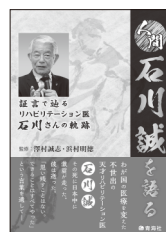
澤村 誠志・浜村 明德（監）

人間石川誠を語る

証言で辿るリハビリテーション医 石川さんの軌跡

山 本 伸 一

（山梨リハビリテーション病院，作業療法士）



石川 誠先生，少しはゆっくりされていますでしょうか。先生のことだから，これまでのように優しい眼差しで私たちを温かく包み込み，見守ってくれているんだろうと思います。いつもありがとうございます。

先生との出会いは1990年代後半で，日本リハビリテーション（以下，リハ）病院施設協会の委員会でした。とにかくキラキラしていて，眩しいほどのオーラだったことを思い出します。私から話しかけるなんておこがましいと思っていたところ，「君は山梨かい？」と垣根を感じさせない，温かい声のtoneで話しかけていただいたのが昨日のことのようです。先生の多大なご尽力で全国回復期リハ病棟連絡協議会が設立され，日本に新たな息吹がもたらされました。それからは，全国リハ医療関連5団体（現9団体）や初台リハ病院の職員教育等でご一緒させていただきました。

全国リハ医療関連5団体とは，日本リハ医学会，日本リハ病院施設協会，そしてリハ専門職3団体の協議会です。2005年（平成17年）にリハ関連団体の合同で厚生労働省へ要望を出そうという目的で結成されました。先生は，その主たるリーダー。リハ関連の団体が初めて顔を突き合わせての議論です。多くの職種が自分たちの専門性を打ち出したい，自分たちの職種の報酬をupさせたい，そのような雰囲気があったのは確かです。先生から「僕たちはチームだろ！ 誰が偉いじゃない。チーム

なんだ」，「損得を考えるな。いいことをやれ。患者にとっていいことをしなさい。それを考えろ。報酬の話はその後だ」というお言葉を何度聞いたでしょうか。私は，先生の言われた「チームのすばらしさ」と「損得を考えない医療，患者中心のリハ」，今でも頭に焼き付いています。確固たる信念が私たちの心を動かし続けました。5団体や多団体会議では，必ずといっていいほど終了後には居酒屋で一杯。私たちセラピスト，そして若い医師たちは，許される時間ギリギリまで先生の熱い話をお聞きし，「よーし，やるぞ」と奮い立ったものです。私は山梨への最終電車が午後11時新宿発の特急かいじです。新宿まで全力で走り，何とか飛び乗るといういつものパターン（笑）。深夜電車の中で，石川先生のお言葉を何度も復習し，酔っぱらった中でメモ書きしていました。

初台リハ病院のリハ専門職の方々とは交流がございました。創立当時から何度も実技指導等に行かせていただきましたが，まずはその病院の構造や人員配置等の仕組みに驚きました。そして，「〇〇先生」ではなく「〇〇さん」と呼び合う光景，セラピストの人数の多さにびっくりし，早番・遅番の体制，9単位リハの充実，患者の食事の提供体制，各病棟でのお風呂のつくり等，患者への生活支援も非常に充実していることは，とても斬新な考え方でした。当時もそして今も，全国の回復期リハ病棟の「お手本」であることは間違

いありません。そのような環境で働いている職員は，大きな志と共に初台リハ病院の一職員として誇りをもっており，その心をもって外へ発信し続けていました。その一つとして，私の勤務先である山梨リハ病院にケーススタディの目的で5～6名のOTが来院。1泊2日の研修です。朝9時から夕方17時まで，入院患者1名1時間のリハ訓練につき，それぞれの病院のOTが1名ずつ，「生」の症例検討会です。双方が激論しながら，患者を中心に「今何をするのか」です。空論ではなく，その場で解決する具体的介入。これは，燃えました。そして，参加したスタッフは，夕方から居酒屋に集合（笑）。熱い話で盛り上がり，これからのリハを語る。モチベーションが上がる。これこそ，人材育成。こうなることも，きっと石川先生はわかっていたんだろうな。先生の教訓は忘れません。これからも見守っていただきたい。

本書は，石川 誠先生の歴史が詰まった記録です。すばらしい方々とのたくさんの出会い。そこで積まれた軌跡。ぜひ，執筆されたお一人おひとりの内容を熟読してください。リハマインドと共にモチベーションが上がると確信します。

「チームのすばらしさ」，そして「損得を考えない医療，患者中心のリハ」を実践して参りましょう。先生，そうですね。

B5判 208頁 2,500円＋税
青海社 刊
☎ 03-5832-6171